

(株)ミラック光学 東京都八王子市 前編

高い技術を誇る町工場にバブルの波
一転崩壊で窮地に立たされた父子は…

微小な電子部品や精密加工部品の測定に欠かせない顕微鏡メーカーとして出発した(株)ミラック光学。コア技術に応用して開発した「アリ溝摺動ステージ」は、位置決め用途のスライドユニットとして高い評価を得、国内外に販路を広げている。

だが、ここに至る道のりは決して平坦ではなかった。バブル景気に翻弄された町工場が裸一貫から再起を図り、復活を遂げるまでの軌跡を2回にわたってつづる。

取材・文/根岸康雄



精密作業現場で使われる創業以来の主力商品「メジャースコープ」

「社長、工場も手狭でしょう
借金も資産のうち
お金ならどこ心配なく」

双眼の顕微鏡メーカーの技術者だった先代、村松雷太郎が単眼の工業用測定顕微鏡に特化したミラック光学を設立し、東京・杉並区内に自宅兼工場を構えたのは1963（昭和38）年だった。

「メジャースコープ」と名付けられた単眼顕微鏡は、主に機械の始動時、刃先を合わせるセッティング用に使用され、多くが旋盤メーカーに納品された。設計と組立てを自社工場が担い、部品は協力工場に外注する形は設立当時からだ。人のマネが大嫌いな雷太郎は公差やリミットにうるさく、許容されるミクロン単位の誤差にもいい顔をしなかった。

「まっ、あの社長のことだから」協力工場も先代の性格を承知で、



代表取締役の村松洋明氏

企業概要

会社名	(株)ミラック光学
事業内容	光学機器の製造・販売
代表取締役	村松洋明
所在地	東京都八王子市松木34-24
設立	1963年
資本金	1,000万円
従業員数	23人
http://www.miruc.co.jp/	

長年取引をしていた。時は'80年代半ば、バブル前夜だ。

「社長、工場も手狭でしょう。借金も資産のうち。お金ならどこ心配なく」銀行がポケットにカネをねじ込むように融資に走った時代、雷太郎は杉並区の永福に百数十坪の土地を購入、自宅と工場を移転した。

息子で現社長の村松洋明（42歳）は、数学が苦手で光学には不向きと、大学卒業後は不動産会社に就職したが、家業の経営状態が芳しくないことを薄々感じていた。父親が大病したのを機に'92年、同社に入社。

「親父、何でもこんなところにアールをつけるんだ!? 四角なら、加工賃だって安く済むのに」

「お前はわかっていない! こうすればシンプルで、デザイン的に味があるじゃないか」

職人気質の父は気に入ったものをつくりたいというこだわりがある。



同社の強みは創業以来培われてきた高度な技術の維持、継承にある。「最後の1ミクロンの精度を出すには人の手が必要」(村松氏)というように、職人の手作業による精度の追求で市場優位性を高めている

息子は顧客が求めるものは安くて良い製品だと考える。ものづくりの視点が違う親子は、よくぶつかった。

「乾坤一擲やるしかない 決断しよう この製品と技術は残そう」

バブルが弾けた90年代前半、土地価格の下落で工場移転が過剰投資となり、負債額が膨らんだ。大手も中小も設備投資を手控え、最悪の時期は、ピーク時の3分の1程度に売上げが落ち込んでいた。

10人程度の従業員の給料の遅配はなかったが、洋明の給料は半分。新婚だった彼は、夫婦で近所にある母校の明治大学和泉校舎の学食を訪れ、密かに食事をしたこともあった。資金繰りが厳しい。親子で取引銀行に緊急融資のお願いに行くと、話の途中で担当者はボタンとノートを閉じ、「これ以上は時間の無駄です」という感じで立ち上がる。

「村松さん、時には貸さないのも親切なんですよ」
担当者の言葉に、親子はうなだれ

た。

つまり、銀行が融資に応じないということは、返済能力がないと見なされているわけで、洋明はヒシヒシとそれを感じた。薬にもすぎる思いで、新宿にある政府系金融機関にも足を運び、親子で頭を下げた。担当者が遠回しに伝えたのは、「考え方を変えないと、難しいんじゃないですか」ということだった。

父と息子は新宿駅近くの喫茶店に入り、古いコーヒーをすすった。刀折れ矢は尽き、万事休した思いだった。「親父、廃業するか」

父は息子を見た。その目の光は弱々しいが、決して同意の意思を伝えてはいない。

洋明の中にも、引つかかるものがある。顕微鏡はプリズムで屈折させた光を落とすのだが、肝となるのはプリズムの位置の調整で、鏡体部分の上の目盛りと下の目盛りがドンピシャと重なるように、技術者が3カ所のネジを締め、少しずつ攻め込んでいく。位置調整で光軸をきちんと出すのだが、その精度は1000分の1mm台の正確さが求められる。

ITが進歩しマシンングセンターで精度が得られるようになって、数ミクロン単位のこの世界は、熟練した技術者の手でしか成し得ない。

うちの会社を持つコア技術こそ日本の強みじゃないか。うちには親父が鍛え上げた技術者がいる。ニッチ

だが、その世界でナンバーワンになれる可能性を秘めている。

「親父な...」。洋明が製図版の前に座る父に声をかけたのは、新宿から戻った日の夕方だった。

「このままなら破綻は見えてる。

乾坤一擲やるしかない。決断しよう。自宅も工場も売って安い土地に移転して、一からやり直そう。一文無しでもいい。この製品と技術は残そう」
「仕方がないな...」

父は天井を仰ぎ一言つぶやいた。

洋明は移転先探しに奔走し、八王子市郊外の小さな土地に工場兼自宅を建て、杉並の土地と建物を売却して負債を大幅に減らした。

95年秋、トラック3台に荷物をまとめ、ついに杉並を去る日が来た。

「お前たち、先に行ってくれないか」
昔気質の親父だから最後は潔く、自分の城を自分で閉めたかったんだろう。生まれてこのかた60数年間住み慣れた故郷を後にしなければならぬ、父親の気持ちは察するに余りあった。

八王子に向かう都道158号線、松が谷トンネルを過ぎると遠くに山が連なる。杉並で生まれ育った洋明は、都落ちの実感が込み上げ、思わず目頭を熱くした。

だが、彼の胸の内には捲土重来を期する熱い思いが、フツフツとたぎっていたのだ。

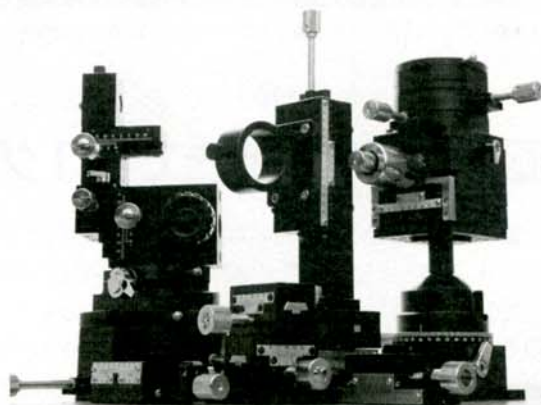
(次回へ続く／敬称略)

(株)ミラック光学 東京都八王子市 後編

新天地で踏み出した再生の一步 客先の声に耳を傾け製品開発で飛躍

工業用測定顕微鏡メーカーとして設立し、その高度な技術力で順調に業績を伸ばしてきた(株)ミラック光学。だが、バブル崩壊で一転、売上げが大きく落ち込み、負債額が膨らんだ。銀行にも見放され、窮地に立たされた父子は、いよいよ自宅と工場を手放し、一からやり直す決断に至る。新天地は八王子市。そこで息子は再起を図るために、ある決意をするのだった……。

取材・文／根岸康雄



各分野で注目され、国内外に販路を広げる「アリ溝摺動ステージ」製品群

「考え方を換えよう。
いままでのやり方が
当たり前じゃないんだ」

1995(平成7)年秋、東京・杉並区から八王子市の小さな土地に自宅と工場を移し、心機一転、仕事を始めた。

「親父さ、協力工場への支払いは現金なのに、売上げについては何で手形なんだい？」

杉並時代に資金繰りの辛さを思い知らされた村松洋明(現42歳)は、収支システムの改善から始めた。当時、入金9割が手形払いだった。

「昔からの決まりなんだ」

「そんな決まり誰が考えたんだ!」仕事上のことで、父親の雷太郎との口ゲンカはしょっちゅうだった。

「お金のことも商品開発も、考え方を換えよう。いままでのやり方が当たり前じゃないんだ」

洋明は得意先である精密機器の専門商社を回り、手形を徐々に現金扱いに変更していく。

親父はいいものをつくってさえいれば売れると思っているが、お客さんのニーズからずれているかもしれない。

洋明はエンドユーザーである機械メーカーや町工場を訪ね回り、工業用顕微鏡「メジャースコープ」が、工場で油まみれの手で扱われているのをつぶさに目にした。ユーザーに

評価されないとここにこだわっても仕方がない。デザインに必要以上に手をかけるのを止め、安全装置などに用いるストッパーの部品を減らすなどの工夫を指示した。

確かに品質は誇れるが、ミラック光学の製品は他社より1〜2割程度高い。バブル後のデフレ時代に、品質だけを売りにするのは弱い。売るためには、メジャースコープに付加価値が必要だと感じていたとき、

「単眼の顕微鏡は目が疲れてね」取引先の工場に耳にした年配者の声に、洋明は反応した。

顕微鏡は目で覗くものだが、CCDカメラで撮影し、モニターに大きく映すことができれば、年配者にとっては目が疲れず楽だな。

早速、CCDカメラを先端に搭載した顕微鏡を製品化してみると、これが評判になった。

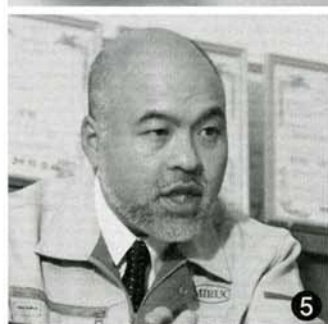
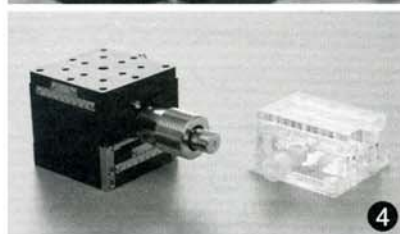
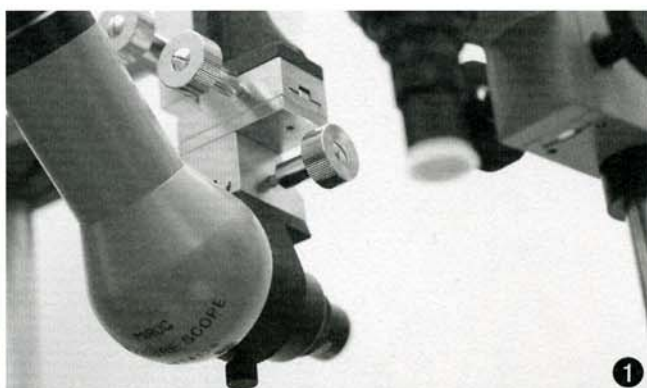
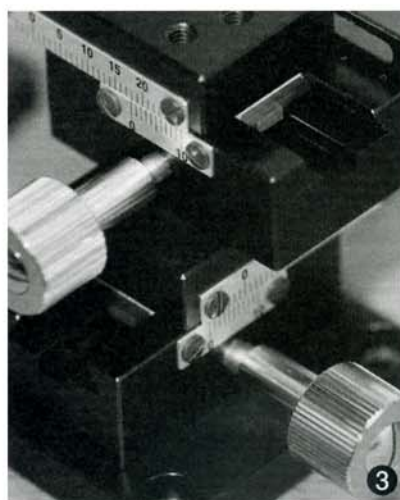
IT化が加速する時代を迎え、製品に使われる部品は微細化して、電子部品の加工・検査装置などにメジャースコープが使われるようになり、品揃えも徐々に充実していった。

「魚は刺し身だけではない。
フレンチやイタリアンにも
アレンジできる」

「うちに広告を載せてみませんか」
「広告なんて効果があるのかな」
洋明が業界紙の誘いに乗り、半信

半疑で小さな広告を載せたのは'00年の春だった。すると広告を見た機械メーカーから、顕微鏡を持って来てほしいと電話があった。早速、洋明はメジャースコープを持ち込んだ。「これいいね、この動きがいいよ」「ありがとうございます」

頭を下げたが、担当者が指差し感心している様子がヘンだ。「顕微鏡を上下させる、このアリ溝式の部分の動きが実にいいんだよ」「えっ」アリ溝式とは溝が切り込まれた台形の台のラック上を、歯車を組み込



- ①「メジャースコープ」にアリ溝摺動ステージを組み込むことで、検査・測定精度は格段に高まる
- ② 同社は知的財産権を多面的に活用することで模倣品の抑制を図っている
- ③ 台形状の溝に沿ってステージが滑らかに動くアリ溝摺動ステージ
- ④ 潤滑油を使わないスケルトンタイプと、ハンドル一つでX軸とY軸が操作できるリバーシブルタイプ
- ⑤「かつて悔しい思いをし、見返したいという気持ちでここまできました。親父も最後は安心したと思います。いいものをつくれ、という声はいまも聞こえてきます」(村松社長)

んだステージが滑らかに動く装置で、ハンドルを回して顕微鏡を上下させ、ピントを合わせる際に用いる。「ゴリ、ムラ、キシミがないよね」「ゴリ、ムラ、キシミとはステージを移動させた際の違和感だが、ミクロン単位の公差に厳しかった父親仕込みの技術者たちの仕事だ。溝の切り込み勘合やラックの高さなど、ヤスリを使った手作業は手間をかけている。他社製品に比べ動きが滑らかだった。「顕微鏡に興味はない？ アリ溝が使えるって、何だそりゃあ？」二度目の大病で、すでに第一線から退いていた父は首を傾げた。「いいねえ」「アリ溝摺動ステージ」として納品すると評判は上々だった。ユーザーはステージの上に装置を載せ機械に組み込む。IT化の加速で微細部品の検査や測定など、正確な動きでピタリと「位置決め」ができるアリ溝摺動ステージの需要は、ますます高まっていくに違いない、と洋明は時代を読んだ。「1回のハンドルの回転で速く、長いストロークで動かすことはできないか」ユーザーの要望で歯車の切り方を変え、1回の回転でこれまでの4倍の18mmの移動が可能なアリ溝式ステージを製品化した。「クリーンルームでこの装置を使う

と、 그리스 からガスが発生する場合がある。 그리스 を一滴も使わないアリ溝式はできますか」それに応え 그리스 不要の樹脂製を製品化した。

親父は魚を刺し身で出す方法だったが、魚はフレンチやイタリアンにもアレンジできるじゃないか。それが俺のやり方かもしれない。

洋明はユーザーの声に耳を傾け、新製品を次々に開発した。いまや品揃えは80種を超える。治工具としても幅広いニーズがあり、取引先は精密機械、FA（ファクトリーオートメーション）、装置関連と各分野に広がった。



生まれ育った杉並を都落ちするようになり、捲土重来を誓ったあの日から、ちょうど15年の月日が流れた。昨年10月、洋明は喫茶店で途方に暮れ、父と廃業を話し合った同じ新宿にあるホテルの壇上にいた。

この日、ホテルでは「勇気ある経営大賞」の授賞式が行われていた。優秀賞の賞状を受け取った洋明は、胸ポケットに忍ばせた、3年前に他界した父、雷太郎の写真にそっと手を置いた。

「よくやったな...」

父の声が聞こえた気がして、洋明は思わず上を向き、目を閉じた。

(おわり／敬称略)